聖　書：使徒 14：8〜18
説教題：生ける神に立ち返る
日　時：2014 年 2 月 9 日

パウロとバルナバはイコニオムで命を狙われ、ルカオニヤの町であるルステラとデルベ、およびその付近の地方に難を避けたと前回の 6 節にありました。その中のルステラでの出来事が今日の箇所に記されています。まず記されているのは、ある足のきかない人の癒しです。彼は生まれつき足のなえた人でした。その彼がパウロの話すことに耳を傾けていました。パウロは彼にいやされる信仰があるのを見て、大声で「自分の足で、まっすぐに立ちなさい」と命じます。すると彼は飛び上がって歩き出しました。これを見て私たちは何を思い出すでしょうか。それは 3 章に記されていた美しの門にすわっていた男の癒しでしょう。あの彼も生まれつき足のなえた人でした。ペテロが彼を見つめ、「ナザレのイエス・キリストの名によって、歩きなさい！」と命じると、たちまち躍り上がってまっすぐに立ち、歩き出しました。あの出来事と良く似ています。ここにはどんなメッセージがあるでしょうか。それはあのエルサレムで起きたのと同じ恵みのみわざが、この全くの異邦人世界でも起こったということでしょう。この癒しの奇跡は、神の救いの世界が確かにここに来ていることを目に見える形で示すものです。イエス・キリストは私たちの体も魂も神が本来意図した祝福の状態に回復してくださる救い主であることを指し示すものです。それがユダヤのエルサレムだけでなく、遠く離れたこの異邦人世界でも再現されている。このキリストによる祝福は全世界の、どこにいる人にも、今や差別なく差し出されている。まさにこれはこの使徒の働きが語ろうとしている中心的メッセージでしょう。

またここで注目に値することは、「パウロは彼に目を留め、いやされる信仰があるのを見て」と記されていることです。この彼の信仰と切り離せないのは、その直前に記されている「パウロの話すことに耳を傾けていた」ということでしょう。神の通常の祝福の仕方は、「信仰を通して」という原則によります。私たちはどうしたらその信仰を十分に強く持つことができるか。それはみことばにしっかり聞くことと切り離せないということです。ローマ書 10 章 17 節：「信仰は聞くことから始まり、聞くことはキリストについてのみことばによるのです。」その人は今日の箇所の彼のように、キリストが提供してくださる豊かな救いに生かされるのです。そのことを思って、私たちは自らの信仰のさらなる成長のため、何よりも御言葉に聞くことを大切なこととしたいと思います。

さて今のことはこれから見る出来事の発端です。群衆は、彼の癒しを見ました。その人々は声を張り上げて叫び出します。11〜12 節：「パウロのしたことを見た群衆は、声を張り上げ、ルカオニヤ語で、『神々が人間の姿をとって、私たちのところにお下りになったのだ』と言った。」彼らがこのように反応したことには理由があったようです。それはゼウスとヘルメスに関する神話です。古代ローマの詩人オヴィディウスが書いたギリシャ神話にメタモルポーセース（変身物語）があります。その第 8 巻に、この地方を舞台とするピレモンとバウキス夫妻の話があります。その内容とは、オリュンポスの神々の主神ゼウスとスポークスマンのヘルメスが貧しい人間の身なりを装ってこの地を訪ねました。そして夕刻に宿を求めて人々の家を回りますが、親切な家は一つもなかった。そうして最後に町はずれの貧しい老夫婦ピレモンとバウ

キスのところに来ますが、彼らは二人の神々をそれとは知らずに迎え入れ、もてなします。その後、ゼウスとヘルメスはこの老夫婦を丘の上に連れ出します。そして二人が振り返ると、谷の町は洪水で滅ぼされていました。そしてゼウスとヘルメスは、ピレモンとバウキス夫妻のあばら家を金の屋根を持つ神殿に変えます。こうして二人に豊かに報いたという話です。このルカオニヤの人々は、この神話を良く知っていたと考えられます。実際、ルステラ近辺からは、ゼウスの祭司たちという句が見える碑文や、ヘルメスにささげた祭壇が発見されています。ですからルステラの人々は、癒しの奇跡を行なったパウロとバルナバを見た時、ゼウスとヘルメスの再訪だと捉えたのです。さあ彼らにとっては一大事。同じことの繰り返しにならないように、洪水のさばきを受けないように、むしろピレモンとバウキス夫妻のように祝福してもらえるように、今度こそしっかりもてなさなくては！と駆り立てられたのです。13 節：「すると、町の門の前にあるゼウス神殿の祭司は、雄牛数頭と花飾りを門の前に携えて来て、群衆といっしょに、いけにえをささげようとした。」　ここにあるのは異教世界の現実です。これまでパウロたちはまず会堂に入って宣教しました。そこにはユダヤ人や神を敬う人々が集まっていました。しかしこのルステラはそうでありません。この町にユダヤ人の会堂はなかったか、あるいはあっても影響力は小さかったのでしょう。従ってここにいる人々は異教の神々の神話や迷信に捕らわれている人々です。何か不思議なことがあると、あの神話の神々の現れだと解釈してしまうような人々です。

このような環境の中でのパウロとバルナバの行動が 14 節以降に記されています。彼らは初め、何が起こっているのか分かりませんでした。人々がこの地方の方言で話していたからです。しかし少し時間が経って、人々のしようとしていることが分かった時、二人は慌てて衣を裂き、群衆の中に駆け込み、叫びながら抗議します。「皆さん。どうしてこんなことをするのですか。私たちも皆さんと同じ人間です」と。12 章最後に見たヘロデ王とは対照的です。これは何よりまことの神を知らないこの地方の人々の霊的暗やみを指し示すものでした。そういう状況で、パウロは何とかまことの神を宣べ伝えようとします。

彼はどのように語ったでしょうか。このルステラの人々は、全くの異教世界に住む人々ですから、ユダヤ人の会堂で語るのと同じように説教することはできません。旧約聖書を用いて、約束のメシヤがイエス・キリストであるという論証をいきなりすることはできません。彼らは旧約聖書を知りませんから、聖書に訴えることができないのです。ではどこから神について語り始めることができるでしょうか。パウロがしたことは神が造られたこの自然世界にまず訴えるということでした。この世界は神の作品であって、そこには神が言わば刻印されています。パウロはその神の作品を指し示して、神を語り出したのです。神はこの天と地と海とその中にあるすべてのものをお造りになった生ける神である、と。

16 節：「過ぎ去った時代には、神はあらゆる国の人々がそれぞれ自分の道を歩むことを許しておられました。」ここでパウロは神は歴史の主であると語ります。ここまでの時代はこのように生きることを許すが、ここからの時代はこうでなければならないと、それを命じる神である、と。後に触れますが、このように言うことによってパウロは今の時代に特別に語りかけておられる神を強調しようとしています。

17 節：「とは言え、ご自身のことをあかししないでおられたのではありません。すなわち、恵みをもって、天から雨を降らせ、実りの季節を与え、食物と喜びとで、あなたがたの心を満

たしてくださったのです。」人々は天から雨が降ったり、実りの季節が巡って来たり、食物が手に入ったり、これを食べて喜びを覚えることができることを、特に何も考えずに過ごしているかもしれません。これは普通のことであって、そこに宗教的な意味はないと。しかしパウロはそうでないと言っています。神はこれらのことにおいて、ご自身こそ、生ける神であることを啓示しておられる。ローマ書 1 章 20 節：「神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。」詩篇 19 篇 1 節：「天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざを告げ知らせる。」マタイ 5 章 45 節：「天の父は、悪い人にも良い人にも太陽を上らせ、正しい人にも正しくない人にも雨を降らせてくださる」

私たちはこのパウロの説教を聞いてどう思うでしょうか。少し神学的な言い方をすれば、パウロはここで特別啓示である聖書に訴えることができないので、自然や歴史といった一般啓示に訴えることから始めたと言えます。そしてある人はパウロの説教がここでとどまっているように、聖書を知らない人は自然世界に示されている神を認め、信じるだけで救われると考えました。すなわち聖書やイエス・キリストを知らなくても、この世界と宇宙を造り、そこにご自身の存在をあかししておられるお方を信じるなら、と。確かにそうだとすれば聖書を伝えられなかった人々、またイエス・キリストを知ることのできなかった時代や国の人々にも救いの可能性があることになります。しかしそれはやはり聖書の教えとは一致しないでしょう。ヨハネの福音書 14 章 6 節：「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」使徒の働き 4 章 12 節：「この方以外には、だれによっても救いはありません。天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人に与えられていないからです。」ではなぜ、パウロは今日の箇所でイエス・キリストについて述べず、一般啓示に属することにとどまっているのでしょうか。この解釈の一つの方法は、パウロは実際にはそれを語ったが、編集したルカが全部は記さなかったという見方です。しかしそれよりもありそうなことは、パウロはこの時の状況ゆえにそこまで語れない内にストップせざるを得なかったということではないでしょうか。パウロがイエス・キリストについて語ろうとしていたであろうことは 16 節から伺えます。彼は「過ぎ去った時代には、神はあらゆる国の人々がそれぞれ自分の道を歩むことを許しておられました。」と言いました。これは言い換えれば、過去はそうであったが、今や神はそれとは違う生き方を私たちに求めておられるという意味に他なりません。パウロはここにおいてイエス・キリストのことを述べようとしていたのでしょう。そして十字架と復活のみわざについて語ろうとしていたのでしょう。それが 15 節で彼が宣べ伝えていると言っていた「福音」です。しかし聖書に全く通じていないルステラの人々に最初からそれを語ることはできません。そこでその大切な部分に至るまで、パウロは人々が見ることができ、感じることができる一般啓示に訴えて話を始めたのです。そこから何とか神についての正しい教えを伝えようとしたのです。神は確かにそこにご自身を示しておられるのですから、それらを用いて神を語ることは正当です。そしてそこからキリストへ話を持っていこうとしたものの、今回の状況はそれを許さなかったということだったのではないでしょうか。

宣教の結果はどうだったでしょう。18 節：「こう言って、ようやくのことで、群衆が彼らにいけにえをささげるのをやめさせた。」　これはやっとここまでこぎつけたということでしょ

う。ルステラ宣教の困難さを示しています。そしてこの後はどうだったか。19〜20 節に少し目をやると、パウロはこの町で石打ちにされてしまいます。ルステラの住民もそこに参加してしまいます。散々な結末です。一体この町での宣教は何だったのか、何の良いことがあったのかと思われるような結末です。しかし一つも良いことがなかったというのではなかった。20 節で石打ちにされたパウロを「弟子たちが」取り囲んでいたとあります。これはルステラの信者たちでしょう。つまりここにはパウロたちの宣教によって、回心した者たちもいたのです。22 節もそうです。そしておそらくパウロの最弟子となるテモテは、この第 1 次伝道旅行の時に祖母ロイス、母ユニケとともに、回心へ導かれたのでしょう。

今日の記事から、私たちは異教世界での宣教の困難さを思わされます。あのパウロでさえ、このように苦心して働いても誤解され、迫害され、ひどい目に会いました。であるなら、私たちがそのような目にあってもさして驚くべきではない。しかしその中で奮闘したパウロたちの姿も心に刻みたいと思います。すぐに聖書から語れない人々に対して、神を語り出すことができる共通地盤に何とか訴えて福音を伝えようとしている。一般啓示それ自体は人を救いには導きませんが、神を語り出すことができる真理があるなら、相手が今いるところから始めて、何とか福音へつなげようとする努力。そしてたとえ人間的に思った通りの結果が出なくても、宣教のわざは進められています。そのことを学んで、私たちも生ける神に立ち返るようにと人々に宣べ伝えるわざに仕え、主に用いて頂く幸いに歩みたいと思います。